

文化財防火デー

毎年1月26日は
全国一斉の文化財防火デーです



昭和24年1月26日、現存する世界最古の木造建造物である法隆寺の金堂が炎上し、壁画が焼損しました。文化財防火デーは、文化財を火災から守ることの大切さを後世に伝え、防火意識を高めるために制定されました。冬場はストーブで暖をとるなど、火を使う機会が多くなります。また、この時期は空気が乾燥し、火災が発生しやすくなっています。「コンセントにホコリをためない」「寝る前に火元の確認をする」など、日頃の防火対策を徹底し、受け継いだ貴重な文化財である町並みを守りましょう。

町民歴史講座のご案内

この講演会は、保存協議会が役場に提案して実施することとなったものです。伝建地区や湯浅の歴史的建造物について、講師の先生のそれぞれの視点から講演していただくものです。

日時：3月28日（金）午後7時～午後8時半（開場：午後6時半）

場所：湯浅町役場 3階 なぎホール

※入場無料・申し込み不要

講師：

【第1部】湯浅町歴史的風致維持向上計画推進協議会委員 山本新平氏

【第2部】湯浅町教育委員会 歴史文化財係 松井美香

みなさん、ぜひご参加ください。

湯浅伝建地区保存協議会

皆様に瓦版をより身近に感じてもらうために、まちなみ瓦版の記事を募集しています！
ご意見・ご要望などございましたら、会長まで連絡をお願いします。

■ホームページ <http://www.eonet.ne.jp/~denken-yuasa>

まちなみ瓦版

■令和 7年 1月 1日
■第 73号
■発行：湯浅伝建地区保存協議会
■発行責任者：藪野 博孝



新春のご挨拶



謹んで新年のお喜びを申し上げます。

旧年中は湯浅伝建地区保存協議会活動へのご理解とご協力を賜り、誠にありがとうございました。

旧年は伝建地区選定から最初の10年目までの復原家屋の修復前と修復後の写真を設計士、施工業者を記載しパネル展示をしました。又本年度は勉強会（講演会）を予定し地域の歴史と景観・文化を守り、次世代へ継承するため、皆さまとともに取り組んでまいります。

どうぞ本年も変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

皆さまにとって幸多き一年となりますよう心よりお祈り申し上げます。

湯浅伝建地区保存協議会 会長 藪野博孝

報告

令和6年度

湯浅町伝統的建造物群保存地区審議会を開催

日時：令和6年11月22日（金） 午後2時より

場所：湯浅町役場 2階 災害対策室

参加者：会長、委員6名、事務局4名、オブザーバー1名

内容：○保存修理が実施されている事業の内容について事務局から報告しました。

今年度は、前年度からの2ヵ年事業2件と今年度の新規事業1件でした。

○保存修理の要望がある事業の内容について事務局から説明を行い、審議しました。来年度は、今年度からの継続事業1件と新規事業2件を予定しています。

○保存活用計画の改定（案）について、現在文化庁とも協議しながら改定を検討しています。次回の審議会で改定することを目指しています。



熊野会長の箸休め

【湯浅党の海上活動】 参考文献 湯浅町誌より・・・



平安時代の末期頃は京都の朝廷権力が漸次弱くなるにつれて、地方の豪族がますます勢力を増大して武士化するに至ったが、我が紀伊地方では、熊野別当および湯浅党の二大勢力が最も優勢であった。又熊野別当は有力な水軍を擁してたと。

熊野水軍は「熊野海賊衆」の名をもって、歴史上でも全国的に有名よね。

南北朝時代になって、湯浅氏の配下にも優勢な水軍があり。熊野の水軍は南伊勢と関東地方における南朝軍の連絡に当り、湯浅氏の水軍は吉野と四国・九州における南朝軍の連絡に努めたようであります。凄いですね～

新田義貞の弟「脇屋義助」が四国における南朝軍の総帥になった時に興国二年(1341 年)田辺付近から伊予に渡ったが、それを援護したのは湯浅党の水軍であったと伝えられます。

又四国から吉野に兵糧を運搬した際に輸送に当たったのも、湯浅水軍であったことが、伊予地方には言い伝えられているらしいですね。

文永十一年(1274)弘安四年(1281)の二回にわたる元の日本征討(元寇)が失敗に終わってからは、わが西南の辺民は朝鮮半島および中国東南の沿岸に進出して、自由奔放に海上に横行するにいたった。中国ではこれを倭寇と称し(この辺りは周知)

正平元年(1346) 吉野の朝廷は紀伊の海賊??を募り、瀬戸内海の手と連合して、九州の官軍を助けしめた。当時の海賊はすなわち水軍であって、湯浅党の水軍が遠く内海および九州沿岸に活躍した片影を語るものである。簡単に言うと海軍の走りやね～

【江戸時代の海運】



前項の海洋における湯浅党水軍の活躍は湯浅党消滅後も湯浅一帯!住民の海上進出の気魄を培っていて

西は九州五島列島近海、東は関東地方にまで進出して、漁業や商業に海運にと活躍する礎になったと思うのよね。

この雄渾な進取的精神は正しく湯浅水軍の精神的な遺産でしょうね。(今の町民にはどうなんやろ??)

明治生まれの国史家『長沼賢海』が広川口は海賊の根拠地であっただろうと言われたように(現在とはちょっと場所が変わっている)、湯浅党水軍の基地は湯浅湾内にあったと考えるのが妥当よね。この辺りは梶原水軍(安宅船)の話も絡めてと思われます。

江戸時代の初期に北村(後の栖原氏) 垣内 (元は熊本の菊池一族)などの房総半島および九十九里浜に新漁場を開いた如き!

又、濱口・岩崎の諸氏が関東で醤油業を創始した如き!

更に湯浅地方の漁人(漁師)が五島海域に遠征した如き!

これ等の壮挙は突如として起こったものでは無し、湯浅水軍時代からの伝統精神に養われた先人がすでに海上活動の舞台を開いていたものと思うのが自然ですよ。

武士・水軍から治世の世になって商人へ・・・つながっていると私は思っています。

元は武士なんやろね～

安宅船 あたけ

方言で「あたける」 やんちゃとか手に負えないとかそんな意味かな?? ええ意味のあたけ者・・・面白いですね。

次号に続く・・・

